国　　語

注　意

1. 問題は全部で16ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで後の問に答えよ。

ことばを得て、私たちの思いや考えが具体的なかたちをとって成り立つこと、それがさらに思索を深め展開させる拠り所になることは、自分の思いや考えをなにほどかにせよ表現しよう、とくに紙の上に記そうと思ったことのある人なら、誰でもその行為をとおして気づかせられるところだ。それはなにも特別な文章、あらたまって書く論文や随筆でなくともいい。日記のようなものでも、手紙でもいい。ただ紋切り型のことば[A]を使ったり他のことばを口真似したりしなければ、おのずとことばが手ごたえをもってきて、そのことを私たちに気づかせるようになる。

たとえば、旅行先のはじめて訪れた町でなにか特別に印象深い光景に接した場合、はじめに私たちをとらえるのはその印象の全体、全体としての感銘であろう。それは印象や感銘としてつよいものであっても、印象や感銘としてもっているだけにとどまれば、私たちは自分がその光景とどのようにかかわっているかを十分にとらえているとはいえない。その印象や感銘をことばにしようとするときにはじめて、私たちは、ことばによってその町やそこで見たもの、出会った出来事と自分とのかかわりを印象の総体のなかから切りとり、それを重ね合わせていくことで、光景と自分とのかかわりに具体的なかたちを与える。このような行為のなかで、一つのことばが書かれると、それが対象と自分とのかかわりを深めていく手掛りになり、それゆえに私たちのうちにそれにつづくことばをよび起こす。こうして、ことばがことばをつぎつぎに喚起して、私たちの見たことや思いが展開されていく。 a

一般にことばには、そういう働きがある。とくにうまい文章や凝った文章である必要はない。ごくふつうの文章でも、私たちがそれを書くときに、一語一語自分と対象とのかかわり合いを的確にとらえて、ふさわしいことばを選ぶようにすれば、また、ことばと対象とのずれを知って、くりかえしことばによって対象に接近するようにすれば、ことばはおのずとそのように働くはずである。

ところが、[B]あらたまって哲学的な思索や思考ということになると、通常私たちは、ことばによってではなく、概念や論理に

よって、それもそれらだけによって考えようとする。また、考えを推しすすめようとする。ことばを使わないわけではないが、使うときにも、意味の限定された明確で厳密な用語をできるだけ使おうとする。もちろんこういう態度は、なにも今に始まったことではない。また、そういう態度をとることにはそれなりの理由もある。というのは、ことば、つまり私たちが日常使っている自然言語には、多義性と曖昧さがあって、厳密な思考を表現として現前化させ推しすすめていくのには適さず、不十分だ、ともいえるからである。たしかにひとは、問題をつっこんで考え、厳密にとらえようとするとき、日常のことばよりももっと限定された明確な言語、概念にもっと近づけられた言語を欲するだろう。精緻な論理を積み上げ、こみ入った構成に耐えうるようなC ケンゴな概念語をつくり出そうとするだろう。そうすることによって、ひとはほかならぬ b な思考をめざすわけである。こうして、専門用語(術語)や学問用語というものがあらわれる。それらは一義的な方向に明確化された概念語であるといえよう。

このような動向のなかで、またこのような概念語を中心に、一般に理論や学問はいっそう精緻になり、いっそう厳密になっていった。哲学あるいは哲学の知の場合にしても、そうである。自然科学では論理的な記号や数式が大きく導入されるが、いうまでもなく記号化や数式化は、それと同じ方向をいっそう推しすすめたものである。一般に理論や学問がこのようなかたちで精緻になり厳密になることは、それ自身としては決してわるいことではない。そのかぎり望ましいことなのだが、精緻になること厳密になることと裏腹に、次のような不都合なことが起きる。理論や学問は精緻になり厳密になればなるほど、こまかく専門化して動きがとれなくなり、それ自身をふりかえり問いなおすことがしにくくなる。そのことは哲学の知がいわゆるドグマ*化し形而上学化D していく方向にみられるだけでなく、哲学の知の科学への解体という方向においてもみられる。しかし、さらにいえば、これら二つのいずれの場合においても、そのような事態は、哲学の知が日常のことばから、自然言語の日常的用法から離れすぎたことに起因するのではないだろうか。

専門用語や学問用語を、また、つくり出された概念語を使うことそれ自体がいけないというのではない。そうではなくて、それらを日常のことばとただ切りはなして使うこと、そういうあり方をよしとすることが問題なのである。専門用語、学問用語と

通常いわれているものは、正確には、ことばの専門的用法、学問的用法というべきなのである。そして、このようにとらえるとき、それらを含んだ専門的な記述や学問的な記述も、日常のことばとのつながりをもつことによって、思考の自由な運動をとりもどすことができるようになるのではなかろうか。

ことばは哲学の知を現前化させ現在化させるために不可欠のものであり、思考の肉体である。この考え方は、ことばは思考の衣装であるとする考え方に明らかにかかわりつつ、対立している。ことばは思考の衣装である、とは、精緻で厳密な論理によって普遍的に思考することをめざす論理分析の立場から、一人の代表者(ヴィトゲンシュタイン)*によってうち出された主張である。この論理分析の立場というのは、専門用語や学問用語を生み出したのと同じく知の精緻化や厳密化という土壌の上に、論理的な言語批判としてあらわれてきたものだ。言語についてのつよい関心と鋭い洞察力をもつこの現代のすぐれた哲学者は、はじめには、急進的な論理分析の立場に立って、「すべての哲学は〈言語批判〉である」と断定した。この断定は「およそ語られうるものは、明らかに語られるものである。そして、論じえぬものについては沈黙しなくてはならない」という決然とした覚悟をもった考え方を背景とし、日常のことばを私たちの思考を欺くものとみなす考え方の前提の上に立っている。そして、このようなものとしてとらえられたことばによる思考に対しての批判と、ことば(日常言語)からの解放にもとづく思考の明晰化を以て、哲学の役割とみなしている。「哲学の目的は、思考を論理的に明晰化することである」といわれるゆえんである。

さて、この見地から、思考(思想)とは意味をもった命題にほかならないが、ことばは思考をありのままで示すものではない、といわれるのである。すなわち、ことばは思考を変装させる。[c]、着物の外形から着物をきせられた思考の形を推定することはできない。それというのも、着物の外形は軀(からだ)が形を他人に知らせるという目的ではなく、別のことを目的としてつくられているからである、と。このように、論理分析の立場では、ことばは、軀である思考の単なる衣装であると考えている。たしかにことばは、軀の形を他人に知らせる目的でつくられてはいない。[d]、それは、ことばが単なる衣装であるためではなく、実はことばが思考を受肉させ、それに具体的なかたちを与える肉体だからである。思考を現前化させるものだからである。もっとも彼も、「日常語は人間という有機体の一部であって、それに劣らず複雑である」といっている。

彼が日常のことばを厳密さを欠いたものとして退けたのは、それに対して無感覚であったからではなく、むしろ鋭い感覚と意識とをもっていたからである。だからこそ、後年になって彼は、「論理学の透明な純粋性といったものは、私にとっては現実のことばの考察から生じたものではなく、一つの要求だった」とみずから述懐し、論理的言語への要求と現実のことばとの衝突に耐えられなくなって、［ e ］に立ちかえることにもなる。こういっている。私たちはなめらかな氷の上に迷いこんでいる。そこには摩擦がないから、すべての条件が或る意味では理想的なのだが、まさにそのために私たちは滑って先へ進むことができない。私たちは歩くことを欲している。だからそのために摩擦が必要なのだ。ざらざらした大地へ立ち帰れ、と。ここに摩擦といわれ、ざらざらした大地といわれていることが、思考の肉体としてのことばに大きくつながっていることは明らかであろう。つまり、思考の肉体としての日常のことばへの着地を自分に命じたものだったのである。ことばが思考の着物ではなくて、思考の肉体であるとは、私たちが思い、考える場合に概念と［ f ］だけによるのではなく、イメージと［ g ］にもよるのだ、ということである。

（中村雄二郎『哲学の現在』による）

［注］

＊ドグマ＝教義、教条。独断的な説・意見。

＊ヴィトゲンシュタイン＝オーストリア生まれの英国の哲学者。

問一　傍線部A「紋切り型のことば」の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 1 。

① 単調なことば
② 常套的なことば
③ 難解なことば
④ 深みのないことば
⑤ 含蓄のあることば

問二　空欄 a に入れる文として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 2 。

① 平明で具体的な文章を書くことによって、自己の考えを他者に効率よく伝達することができるのである。
② 印象深い光景を細やかに描写することは、個人の体験をより鮮明なものとして残すことになるのである。
③ 書くという行為を続けることによって、人は自己の内面と向き合い、成長することができるのである。
④ 対象とのかかわりを深めていくことが、見ることや思いを深めていくことにほかならないのである。
⑤ ことばが持つ連想的で創造的な性質を意識することが、文章の上達において最も重要なことなのである。

問三　傍線部B「あらたまって哲学的な思索や思考ということになると、通常私たちは、ことばによってではなく、概念や論理によって、それもそれらだけによって考えようとする」とあるが、その理由として最適なものを、次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 3 。

① 哲学は他の学問よりも複雑なものであり、その正確な記述には概念がより明確な論理的言語を必要とするため。
② 日常の言語は、曖昧性を含む不完全な言語であり、哲学の思弁的で難解な内容の説明には全く適さないため。
③ 自然言語は、一義的に限定された明確な言語とは言い難い側面を持っており、厳密な思考には適さないため。
④ 明確に定義された概念や論理を用いることで、哲学で陥りがちな独善的な思考を回避することができるため。
⑤ 哲学を個別の文化や社会をこえて万人にとって等しく理解可能な実用的学問へと高めていく必要があるため。

問四　傍線部C「ケンゴ」の「ケン」にあたる漢字を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 4 。

① 圏　② 堅　③ 研　④ 権　⑤ 健

問五　空欄 b に入れる最適な言葉を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 5 。

① 画一的　② 帰納的　③ 普遍的　④ 批判的　⑤ 創造的

問六　傍線部D「形而上学化していく」の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 6 。

① 形式化ばかりにとらわれ、中身が空疎な学問となっていくこと。
② 他分野との繋がりの薄い自己完結的な学問となっていくこと。
③ 現実から遊離した抽象的で観念的な学問となっていくこと。
④ 高度に体系づけられた専門性の高い学問となっていくこと。
⑤ 一般社会には役に立ちにくい非実用的な学問となっていくこと。

問七　空欄 c 、 d に入れる表現の組み合わせとして最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① c＝それゆえ　d＝しかし
② c＝しかし　d＝なぜなら
③ c＝もっとも　d＝むしろ
④ c＝とはいえ　d＝したがって
⑤ c＝にもかかわらず　d＝一方

問八　空欄 e に入れる最適な言葉を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 言語批判
② 思考の衣装としてのことば
③ 論理分析
④ 哲学の解体
⑤ 日常のことば

問九　空欄 f 、 g に入れる表現の組み合わせとして最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 9 。

① f＝理念　g＝創造力
② f＝観念　g＝考察力
③ f＝感覚　g＝分析力
④ f＝論理　g＝想像力
⑤ f＝言語　g＝洞察力

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

作家関川夏央は一九九五年二月二十六日の朝日新聞の書評欄で『風の谷のナウシカ』を取り上げている。そこで彼は、執筆にあたり、マンガがこれまで書評の対象になってこなかったことを知らされて驚いたと書いている。

だが、この関川の書評を読んだときのぼくの感想は、マンガの「書評」がないなんてことは、今さら別に驚くようなことだろうか、といったものだった。そんなもの実際にめったにお目にかからないし、それどころか、必要ないとさえ思われてるんじゃないだろうか、と。筆者自身、一九九九年春から秋にかけて、『読書探検』という小冊子にマンガの「書」評を連載した。最初に取り上げたのは『カイジ』*だったが、それに先立って言いわけめいたものを書かずにはおられなかった。「これって『読書探検』で取り上げる本のカテゴリーに入るのだろうか。なにせ、これはコミックスである。なるほど、マンガだって「書」だろう。本屋に売っているし、図書券でも買える。過去の『読書探検』にもコミックスが扱われたこともあるようだ。そうは思っても、どうもひっかかるものがある。」

こんな弁明が必要なくらい、書評というものは、そもそも小説とか思想とか、高級なテキストについてなされるものと考えられている。いや、一般に何々評というもの、すなわち批評という行為そのものが、その対象を、社会的にひろく価値を認知された文化財、すなわち、文化資本に求めるのだろう。だから日本ではマンガ評というものは少ないし、「漫才評」や「歌謡曲評」、「ゲーム評」といったものも――演劇評やクラシックのコンサート評はあるのに――あんまり聞かない。それは、それらの表現手段が文化資本になっていないことを意味している。

興味深いことには、そうした「低級文化」は文化資本でないが、まさにそれゆえに本来的な意味での資本と解される。つまり、それがモノとしていくらいくらの価値があるかということが大事になる。ある歌謡曲がどのような芸術的価値を持っているかを論じることよりも、それが売れているかいないか、すなわち、商品として価値があるかないかということに人々の関心はむくのである。極端に言えば、作品としてひどくても売れればいいじゃないか、という話になる。

もちろん、これはいわゆる消費資本主義社会の一般的特徴ではある。だが、「高級文化」はこうした商品化に抵抗する、あるいは、抵抗するべきだと思われている。C文化資本は、まさにそれが文化資本であるがゆえに、本質的な意味での資本ではない。ある文学作品の価値は、その作品の売り上げに関係なく、その内在する芸術的価値によって定まるとされる。それは一般に商品としての価値にむしろ［　a　］するとさえ思われているのだ。つまり、芸術的に高いものほど、一般大衆には受けないし、したがって、商品としては成功しないだろうという通念が存在している。だから、生涯に一枚の絵も売れなかったD゛ゴッホは、まさにそれゆえに大芸術家として尊敬されるわけだ。

さて、文化資本はどのような特性を持つのか。まず第一に、文化資本はE保存される。古典文学は名作文学全集という形で繰り返し刊行され、図書館に、書斎に保存され続ける。

大学の図書館にコミックスが収められていないのも、「文化資本」に対する考えに基づく、意図的な選択である。ぼくはある年、大学で行った文化論演習で、『デビルマン』*を学生と輪読した。その際、『魔王ダンテ』*や『(コミック版)ダンテ神曲』*を参考図書として図書館に入れてもらった。翌年、同じテーマで演習した際に、『魔王ダンテ』ほかの図書を、図書館にあるはずだからといって、参照するように学生に指示した。ところが、学生から、そんな本は図書館にないという苦情がきた。それでFフシンに思って調べてみたのだが、大学ではかつてコミックスを収納すべきかどうか議論があって、結局、大学図書館にはふさわしくないので、入れないということに決めたらしいのである。ぼくが参考図書として指定したコミックスは、ぼくの演習が終わったと同時に廃棄されたものと考えられる。

個人の家庭でもマンガは保存されない。保存されるのは高級文化、つまり文学だけなのである。高級家具店の応接セットには、しばしば、書棚にダミーが置かれることがあるが、これは百科事典でなければ、世界名作文学全集とかである。筆者が一九九九年春に、大阪北教養市民ルームで渡辺淳一の『失楽園』*を論じたときに、聴講者のほとんどはこの小説が「後世に残る」とか「残らない」とかいう基準で好悪を表現した。おもしろいことに多くの人は、さらにこの本を自分の部屋の書斎に置きたい、あるいは置きたくないということを口にしたのである。ある作品が「後世に残るもの」と認知される、すなわち、それが

「 b 」と認知されるということは、（おそらくは立派な）書斎に飾られる権利を獲得するということである。逆にマンガは捨てるべきもの、特に書斎になどけっして置いてはいけないものなのだ。

一つの理由は、その価格にある。マンガは出版部数が巨大であるし、日本のコミックスは白黒印刷で紙質もそれほど上等ではないのが一般的であるから、B6版で五百円強、新書サイズで四百円前後と、他の出版物に比べるとかなり低目の値段設定になっている。したがって多くの人は読み終わったコミックを捨てるのにさほど c を感じない。

新刊のコミックが廉価であるのに比べて、G古本市場が投機的なのは、それと相関している。新しいマンガは（一冊あたりの）価値が商品としても文化資本としても低いので保存されず、その結果、マンガの古本は逆に稀覯性（きこうせい）が高まるのである。一九六六～七一年刊行の『巨人の星』*初版が十万円程度で売られているのを古書店で見たことがあるが、同じくらいの値段で百年前の、明治期の名作文学の初版本が買えたりするのである。驚くべきことだというほかない。

図書館に保存されないということ、それは歴史的研究をはじめとする人文科学的研究の資料にマンガがなりえないことを意味している。日本全国どこでも、研究者が夏目漱石の作品の初版のテキストを、あるいはそれと同じ内容のテキストを見つけることはきわめて容易だが、『巨人の星』の初版テキストを引用することは、自らの蔵書として持っていない限り、かなり困難である。引用できないということは、それについて論文が書けないし書いてはならないということである。マンガが資料として整備・保存されていないということは、「マンガ学」というものが実は成立していないことを示している。研究者の批評という行為は、実は文化資本の形成に加担することでもある。何かについて書くこと、それは何かが意味のあるものだと認定することになるのだ。そのような価値をコミックはまだじゅうぶんには獲得していない。

マンガは趣味性の優先する（と見なされている）種類のテキストである。そこでは作品の性格、構造、テキストの戦略的位置などよりも、それに対する好悪が判断の基準として絶対視される。

だが、このような状況は、次第に変化しつつある。一つにはコミックの復刊という現象が増えつつあることだ。マンガの文庫化が本格的に始まったのは一九九二年頃のことであった。

逆説的なことに、[H]これはマンガの古典化、高級文化化のための戦略であった――もちろん、売り上げ向上のための戦略でもあったのだが――。

実際、文庫化によって定価がより低廉になることはなかった。もちろん、マンガの文庫化は、入手困難な過去の名作の再版という意味が強かったから、それも当然であったが、しかしながら、B6版や新書サイズ版のコミックが文庫化されて、しかも、それよりはるかに高価だというようなことも、ままあったのである。

元来、ペーパーバックである文庫が高級読み物の［ d ］になるというのは皮肉な話だが、このような特殊なイメージを日本で作り出したのは、もとをたどれば岩波文庫であった。岩波文庫の巻末に付せられている「読書子に寄す――岩波文庫発刊に際して――」には次のようにある。「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。（…中略…）いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書をきわめて簡易なる形式において[I]逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。」こうして文庫は、志の高い教養人のためのフォーマットとしてのイメージを獲得したのである。マンガの文庫化が開始されたときに、編集者はおそらくそのあたりの事情をよく理解していたのである。文庫化のためにまず選ばれたのが、現代日本マンガ史のなかで、「古典」とか「芸術的名作」とかいう言葉で表現される作品を残した数少ない作家の一人、手塚治虫であったことはそうした文脈で理解できる。

マンガが文化資本になる時代は到来しつつあるのだろうか。そうなのかもしれない。だが、実際のところ、ではマンガが古典性を得るべきかどうかということになると、筆者はあまり自信がない。古典性を持つということは、ある意味でそれが書斎つき高級家具つき高級マンションといったものと結びつくということだ。そして、それは、高級家具や高級マンションを購入できる資産と連動している。古典性は依然として「階級」差のゆるやかな表現であり続けている。「ブルジョア」は「古典文学」を読み、「庶民」は「大衆小説」を読むことになっているらしいのだ。もしぼくたちがそのような階級差を――かりにそれがテキスト上のもの、イメージ上のものにすぎなくて、現実の社会的関係ではもはやなくなっているとしても――解消したい、あるいは縮小させたいと考えるならば、マンガの古典化を目指すのでなく、「古典」というもの自体の解体を模索していかなければならないのかも

しれない。

（ヨコタ村上孝之『マンガは欲望する』より）

［注］

＊『カイジ』＝福本伸行のギャンブルを主題としたマンガ。

＊『デビルマン』＝永井豪の悪魔的ヒーローを中心としたマンガ。

＊『魔王ダンテ』＝永井豪の変身ヒーロー物のマンガ。

＊『（コミック版）ダンテ神曲』＝永井豪がイタリアの古典文学ダンテの「神曲」をマンガ化したもの。

＊『失楽園』＝渡辺淳一の不倫愛を主題としたベストセラー小説。

＊『巨人の星』＝川崎のぼる（作画）・梶原一騎（原作）の野球マンガ。

問一　傍線部A「今さら別に驚くようなことだろうか」とあるが、筆者がそう思った理由として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 10 。

① 批評はその対象の文化的内容と芸術的表現を分けて論じるのが一般的な方法であるから。

② モノとしての価値が芸術的価値と一体化していなければ批評すべき論点を持ちえないから。

③ 批評とはその対象が社会的にひろく価値を認知されたものにしかなされないものであるから。

④ マンガはそもそも「低級文化」なのであり、売れなければ「書評」の対象として扱われないから。

⑤ 一般大衆から支持された文化は真の意味での芸術作品として批評家が取り扱うべきものではないから。

問二　傍線部B「本来的な意味での資本」の説明として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 11 。

① 見た目は低級でも質のよいもの。
② 内容はともかく売行きのいいもの。
③ 高級志向の需要にこたえ得るもの。
④ 社会的に商品として流通しないもの。
⑤ 文化資本としての条件を満たしたもの。

問三　傍線部C「文化資本は、まさにそれが文化資本であるがゆえに、本質的な意味での資本ではない」とあるが、その説明として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 12 。

① 商品としての需要が発生しなければ、その芸術作品には文化資本としての価値はないということ。
② 消費的なモノとしての芸術は大量に流通し、文化資本としての高級感は失われてしまうということ。
③ 商品的価値が高いものほど芸術性が低く、芸術性が高いものは一般消費者の購買欲に対応できないということ。
④ 消費資本主義社会では高い芸術性を認知されることで、かえってその商品としての価値を失うことがあるということ。
⑤ 庶民にとって高級な価値のある芸術品は特別なものであり、それを消費する資格は自分たちにはないと考えられているということ。

問四　傍線部D「ゴッホは、まさにそれゆえに大芸術家として尊敬される」とあるが、その理由として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 13 。

① 一枚の絵も売れなかったということは、そのとき彼の作品が一般大衆受けしなかったことを意味するが、それは同時に文化資本としての芸術性の高さを証明することにもなるから。

② 大芸術家は同時代にはその独創性も評価の対象にはならないが、価値観の変化した次の時代になれば作品の独自性が見出されるという通例にゴッホはまさしく合致しているから。

③ 一般大衆にとって芸術作品の価値はそれがどれだけ世間に知られているかが重要であるが、ゴッホはそうした大衆性だけでなく批評家からの資本的価値も得ることができたから。

④ 消費資本主義社会においては芸術的価値と商品的価値との境は曖昧であり、その両面から稀覯性（きこうせい）を認められたゴッホは真に大芸術家としての条件を満たしているといえるから。

⑤ 芸術作品の評価は一般大衆の好みによってつねに変化するものであるが、ゴッホの作品はそうしたなかでいつでも一定の大衆と批評家の評価を得て生き残り続けてきたから。

問五　a に入れるのに最適な語を、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 14 。

① 従属　② 正比例　③ 反映　④ 迎合　⑤ 反比例

問六　傍線部E「保存」と逆の意味でつかわれている語を、傍線部Eから傍線部Gまでの本文より漢字二字で抜き出して記せ。**解答用紙（その2）を使用。**

問七　傍線部F「フシン」を漢字で記せ。**解答用紙（その2）を使用。**

問八　b に入れるのに最適な語を、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 15 。

① 上品　② 有用　③ 古典　④ 商品　⑤ 新鮮

問九 [c] に入れるのに最適な語を、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は [16]。

① 不覚　② 焦燥　③ 憤怒　④ 誤謬　⑤ 痛痒

問十 傍線部G「古本市場が投機的なのは、それと相関している」とはどういうことか。説明として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は [17]。

① マンガは廉価であるため多くが捨て去られる結果、残ったものに稀覯性が生じ古本業界では高価な商品として取引され得るということ。

② マンガはそもそも大量消費される文化資本的価値を有する文化財であり、時がたち受容者が増えるとさらに高価になるということ。

③ 消耗品としてのマンガの特性により、それを見込んでストックした古書市場では元値よりも高値でそれを商品化できるということ。

④ 古書市場は一般の資本主義的商品市場とはことなり、商品の値段はその時々の需要の有無によって乱高下するということ。

⑤ マンガの古書的価値は作品が絶版となったときから需要が生まれ、古典化するまで値段は上昇し続けるということ。

問十一　傍線部H「これはマンガの古典化、高級文化化のための戦略であった」とはどういうことか。説明として最適なものを、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 18 。

① 日本においては文庫本に高級なイメージがあり、マンガを文庫化することで芸術的名作としての価値をあたえようとしたということ。

② マンガを文庫化すればつり上げられた古書価が下がり、文化資本として妥当な価格でふたたび商品化できるということ。

③ かつて需要のあったマンガ作品にふたたび光を当て商品化するために、文庫版という手軽な形態を採用したということ。

④ コミックを復刊することであらたな読者を開拓し、あわせて「マンガ学」成立の環境を用意しようとしたということ。

⑤ 文庫化によって買いやすさを実現し、芸術性の希薄なマンガの文化的認知度を高めようと画策したということ。

問十二　d に入れるのに最適な語を、次の①～⑤より選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 19 。

① 中枢　② 利権　③ 指標　④ 余得　⑤ 是正

問十三　傍線部I「逐次」の読みを平仮名で記せ。**解答用紙(その2)を使用。**

問十四　本文の要旨として**正しくないもの**を、次の①～⑤より**一つ選び**、記号をマークせよ。解答欄番号は 20 。

① 研究者の批評行為にはその対象を文化資本化する可能性も伏在している。

② 「古典」と「大衆小説」の間にはゆるやかな「階級」差が反映されている。

③ マンガも文化資本の一つとして将来的には古典として認知されるべきである。

④ マンガが文庫化で高級感を持ったのには岩波文庫のイメージが関与している。

⑤ 「古典」は高級だという認識についてもっと考えるべきなのではないだろうか。